

広島大学の若手研究者に聞く

グローバルキャリアデザインセンター特別研究員 長江綾子さん

研究テーマは「教員支援」。特に病気で入院中の小中学生に病院内で適切な教育的支援を行う、「院内学級」に課題を絞って取り組んでいます。

教員を支えたい

私自身、高校時代にある病気で入院を繰り返していました。そのとき、院内学級の存在を知ったことで、院内学級の先生に憧れ、心理学を勉強してから教員になりました。もともと大学院に進学しました。

ところが、大学院時代に学部を卒業して「足早く教員になった同期が、心を病んで次々と教員を辞めていく姿を目の当たりにするようになり、違和感を覚え、子どもを支える教員が元気で幸せでない、子どもにいい教育はできないのでは、と思うようになったのが、キャリアの方向を変えるきっかけに。教員を支えるためには、専門性と実践力が必要だと感じ、ドクターに進学しました。

「教員支援」(院内学級)が研究テーマ

共通するのは孤独感

院内学級の担当教員に行ったインタビュー調査結果などを踏まえた、これまでの研究から、院内学級の児童生徒は、発達障害や精神疾患の子どもの増加などで、心理的支援ニーズは大きくなっ

ていることが分かりました。一方で、院内学級担当教員も、病弱教育の研修が少ない、不安定な雇用など、支援体制が十分でないため、困り感が増大している実情が垣間見えてきました。院内学級担当教員は共通して孤独感を抱えています。

このため、院内学級担当教員の専門性の向上を図ることに加え、院内学級担当教員だけの対応では限界があるため、スクールカウンセラーなど外部リソースとの連携により支援する必要性を痛感するようになりました。

子どもを日常的に支援する教員をどう支えていくかということが、子どもの教育を充実させるといふ観点でも、院内学級担当教員とスクールカウンセラーとの連携など教員支援不可欠

「研究」と「実践」をつなぐ役割も

「つなぐ」役割をしながら、私が広めていきたいな、と思っているのは、「存在に対する自己肯定感」です。教員にも、子どもにもそれぞれに良さがありません。教育を通して、子どもたちに、能力だけでなく存在に対する自己肯定感を育んでいきたいと思っています。そのためにも、教員自身が自分の存在に自己肯定感を持つことが大切。教員が自分の教育に自信を持つてもらえるよう、理論と実践をつなげていくつもりです。

者の「つなぐ」役割がグローバルキャリアデザインセンターの特別研究員として、研究の世界も現場の世界も知る機会を与えられている私の役割だと思っています。

自己肯定感を大切に

「つなぐ」役割をしながら、私が広めていきたいな、と思っているのは、「存在に対する自己肯定感」です。教員にも、子どもにもそれぞれに良さがありません。教育を通して、子どもたちに、能力だけでなく存在に対する自己肯定感を育んでいきたいと思っています。そのためにも、教員自身が自分の存在に自己肯定感を持つことが大切。教員が自分の教育に自信を持つてもらえるよう、理論と実践をつなげていくつもりです。

教員の幸せが子どもの幸せにつながります。私のミッションは「教員支援を通して幸せの輪を広げていくこと」です。

(聞き手・日川)



「教員支援を通して幸せを広げたい」と話す長江さん

長江綾子(ながえ あやこ)さんプロフィール

1982年生まれ。江田島市出身。2006年、広島大教育学部卒。08年3月、広島大大学院教育学研究科(前期)修了。同年4月、同科のドクターに進学した。12年4月から広島市のスクールカウンセラーを務めている。17年4月、広島大グローバルキャリアデザインセンターの特別研究員に採用。所属学会は日本学校教育相談学会、日本育療学会など。趣味はバレーボール。東広島市在住。



広島市内の小中学校でスクールカウンセラーもやっている長江さん